



苗場山の地形と自然、生態系、国内でも稀なその特殊性

苗場山の標高は 2145m で、長野県と新潟県との境にある。山体は火山性噴出物である溶岩、火砕流や泥流の堆積物でできている。約 30 万年前に四度の大きな噴火があり、山頂部の平坦面は四度目の噴火で流れ出た溶岩で成り立っている。

山頂より西南側に広がる平坦面は、南北 4km, 東西 2~3km で、約 10 km²の面積を有する。そこは広大な湿原となっていて、約 3,000 もの大小池塘が点在している。

苗場山麓に雪が降るようになったのは 10,000~8,000 年ほど前に日本海に暖流が流れ込むようになったころである。この降雪により山頂の湿原化が始まったのは 4,000 年ほど前のことといわれている。

山体の下部には結東層という硬い岩盤が標高 1,600m 付近まで見られ、この山を源とする硫黄川や小赤沢川はこの標高付近から流れ出している。

苗場山の植生は、トレイルの登山口となる小赤沢集落から 3 合目（標高 1,310m）辺りまではブナを中心とした落葉広葉樹林で、4 合目（標高 1,470m）を過ぎるとオオシラビソが主の常緑針葉樹林となり、5 合目（標高 1,580m）を過ぎ斜面が急になるとダケカンバが目立つようになる。

山頂部の植生は、大きく三つに分けることができる。ワタスゲやコバイケイソウなどの湿性植物が見られるミズゴケ湿原（高層湿原）、オオシラビソやコメツガなどの針葉樹林、その林を縁取るように群落をつくっているチシマザサとチマキザサの笹原である。

山頂部から湯沢側に向かう「祓川コース」では、神楽ヶ峰との鞍部に「お花畑」と呼ばれる草原があり、それまでのコースとは全く違った高山植物を見ることができる。

湿原の池塘内にはミヤマホタルイやヤチスゲが生え、その様子が「苗田」を思い起こさせるところからついた山名である。